

触れられることから考えても、TriSでいかに依他起性が重要視されているか、依他起性が三性の中心と考えられているかが伺えよう。この点はMSと共通している。そのほか上にも挙げたように、依他起性を「顕現する主体」「言語表現する主体からなるもの」として、「拠り所」ではなく「主体」とすることがあるのもこの論書の特徴と言えよう。

清浄と雑染の問題に関しては、遍計所執性と依他起性が「汚れの特徴 (samkleśa-īakṣanam: 17b)」として、円成実性が「清浄の特徴 (vyavadānasya lakṣanam: 17d)」として説かれている。

ここでの三性説もやはり知識の中に取り込まれたものであり、特に依他起性に関しての詳細な説明からはかなり発展した形態であることが見てとれる。この三性説は少なくとも八識と関連付けられており、「名づける」「因相」「分別」「真如」といった語句からは五法が意識されているようにも思える。また遍計所執性が「二つのもの」、依他起性が「アーラヤ識」と「七転識」というようにそれぞれが二つに分けられていることにも注意したい。

Lanḥāvatārasūtra⁽⁴²⁾ (LAS)

LASでは第II章を中心に三性説に関する記述が見られる⁽⁴³⁾。そのうち最も具体的に三性が説明してある箇所はB. Nanjio (1923) pp.67.2~68.7であり、そこでは本体の三つの特徴 (svabhāva-lakṣaṇa-trayam: p.67.2~3)として以下のように分類されている。

(遍)因相から生じる (nimitat pravartate: p.67.4)

事物の因相や特徴への執着 (vastu-nimitta-lakṣaṇābhīvesāḥ: p.67.7): これはさらに次の(1)(2)に分類される。

(1) 名への執着、因相の特徴(名)への執着、自己内と外界の諸現象(諸法)に対して独自と共通の特徴を遍く知ること、識別すること (nāmābhīvesāḥ, nimitta-lakṣaṇābhīvesāḥ, adhyātmika-bāhyeṣu dharmeṣu sva-sāmānya-lakṣaṇa-parijñānāvabodhaḥ: p.67.12~13)

(2) 名に対応する事物の因相への執着、自己内と外界の現象(法)への執着 (nāma-vastu-nimittābhīvesāḥ: p.67.9~10, adhyātma-bāhya-dharmābhīvesāḥ: p.67.11)

(依)事物の因相や特徴を形としてもつ (vastu-nimitta-lakṣaṇāktāra: p.67.6)

(遍計所執性がそれを) 依り所あるいは縁り所として生じているところのもの (yad-āśrayāmbanāt pravartate tat: p.67.14~15)

(円)因相と名という事物の特徴への構想を離れた真如 (nimitta-nāma-vastu-lakṣaṇa-vikalpa-virahitā tathatā: p.67.16~17)

聖者の知識の理解に入った、つまり内证的(自内証の)聖者の知識の理解の領域に

あるもの (ārya-jñāna-gati-gamana-pratyātmārya-jñāna-gati-gocara: p.67.17)

如来蔵の真識 (tathāgata-garbha-hṛdayam: p.68.1)

そして最後に II-134において、三性と五法との関係が述べられる。ここでは因相と名と分別が遍計所執性と依他起性に、正智と真如が円成実性に振り分けられる。さらに五法の前三者は、直前の遍計所執性を説明した散文部分を参照すれば、それらのうち因相と名とが遍計所執性に相当することが分かる。

円成実性が如来蔵と関連づけられていることは特筆すべきことである。

また第VI章でB. Nanjio (1923) p.225.5~17, pp.227.8~228.4にも三性 (trayaḥ svabhāvāḥ: p.227.10)に関する記述が見られる。

(遍)「自己」と「自己に属するもの」(ātmātmiya: p.225.8, 14, p.228.1)

名、因相 (nāman, nimittam: p.227.11)

(依)虚妄分別 (abhūta-vikalpaḥ: p.225.14)

自らの心に現れた(像)の分別 (sva-citta-dṛśya-vikalpa: p.225.16)

それ(遍計所執性)を依り所として生じている分別 (tad-āśraya-pravṛtto vikalpaḥ: p.227.12~13)

「心」と「心に属するもの」(citta-caitta: p.227.13)

(円)正智、真如 (samyag-jñānam, tathatā: p.227.15~16)

ここでは五法の中に三性と八識と二無我が包摂される (p.227.8~11)とされており、まさに種々の唯識学説の総合とも言うべき記述である。

先に見た部分では五法のうち分別がどこに配当されるのか明らかではなかったが、この記述によりそれは依他起性に相当することが分かる。

注意すべきは遍計所執性と依他起性において、「自己」と「自己に属するもの」、「心」と「心に属するもの」というように、それぞれに「捉えるもの」と「捉えられるもの」の二つが当てられていることであり、こうした分類はMSAやTriSにも見られた。そして遍計所執性の二を離れることが二無我につながり、依他起性は八識との関わりをもってく⁽⁴⁴⁾る。

また、遍計所執性を依り所に依他起が明らかになるという考え方は他の経論には見られないユニークなものであるが、こうした記述は p.150.9~16⁽⁴⁵⁾にもある。

ここでは依他起性が外界の対象そのものではなく知識内に現れた形 (ākāra) とか分別といったものを指していることから見ても、三性説はMSAやMAV以来見られるような、知識内に取り込まれたものとなっている。そして三性、八識、二無我が五法に包摂されていることおよび円成実性の如来蔵との関連が説かれることから、LASは諸々の唯識派の学説および如来蔵思想の成立以降、早くともSNSやVinSgよりは後に成立したものだと言えよう。⁽⁴⁶⁾

ただ、唯識派特有の用語が頻出するにもかかわらず、その教説の特徴としては中観派の二諦の側面を強くもっていることは看過できない。このことは今までの研究でも盛んに論じられてきている。⁽⁴⁷⁾

以上の個所によってLASに説かれる三性説はほぼ押さえられることになるが、あと一個所、三性説について比較的多くの記述が見られる部分がある。ここではまず散文部分で遍計所執性の分析がなされ、その後偈頌部分で三性の相互関係が説かれていくが、まさにその偈頌部分にAs45cdとはほぼ一致するLAS II-191abが含まれている。⁽⁴⁸⁾しかしこの一連の偈頌は前後との関係が読み取りにくく、これだけでは十分に理解できるものではない。これは三性説に関する記述のある他の個所と比べても、あきらかに統一性がなく、他の文献からの引用の寄せ集めの観を呈している。あえてその三性説の特徴を挙げれば、二諦の観点からのもの⁽⁴⁹⁾、五法との関係、唯識的あるいは唯心的なもの⁽⁵⁰⁾の三点が挙げられよう。しかし校訂テキストの読みが不確かなこともあって多くの偈ではいくつかの読みが可能になっており、恣意的な解釈にならないように注意する必要がある。

4. As 45 と三性説との関係

As45は二諦の観点から説かれたものであって、そこに三性説が体系的に説かれていたとは言えず、またその著者が三性を意識していたかどうかとも明言できない。しかしそれをあえて三性説の発展の中に位置付けるとすれば、それはSNSやVinsgに見られる体系として確立した三性説の前段階にあるもの、と言える。この点からAsの著者問題を考へる時、次の二つの仮説を立てることができよう。一つは、AsはNāgārjuna後期の作である、⁽⁵¹⁾というものである。二つ目は、AsはSNS成立以前の誰かが、Nāgārjunaに仮託してMKの思想を説いたものである、というものである。またさらに論を進めることが許されるとして、もしAsに三性説の萌芽を認めることができたら、三性説は瑜伽行派によって創設されたものではなく、Nāgārjuna以来の二諦説から派生したものであるということになる。このことは本稿で見てきた諸経論の記述と矛盾することはないし、特にMAVやLASにおいて積極的に支持されている。⁽⁵²⁾

BBhでは三性は説かれていないが、後の三性に相当する概念が説かれている。そこにAs45のものと同様の関連性を見出すのは難しい。用語としてはAsの方が以後の三性説との結びつきが強いと考えられる。竹村氏が主張されるようにBBhも三性説の起源と考えて差し支えないと思われるが、もう一つ別の契機としてAsも挙げられないだろうか。

SNSとVinsgに見られる、いまだ知識の中に取込み込まれていない三性説はAs45の捉え方に非常に近いものとも言えよう。これらの経論では、依他起性を外界の対象とし、遍計所執性を言語表現された対象、円成実性を言語表現される以前の対象と捉える。本稿3の冒頭でも触れたように、そもそも三性とは形容詞としての用語であり、それらは外

界の対象あるいはこの現象世界の異なるあり方を示したものにすぎない。したがって、正確には、依他起性では縁起して生じた性質、遍計所執性ではその縁起する外界が言語習慣によって分節化され、それぞれが何らかの実体をもつものと構想された性質、円成実性ではその縁起する外界が言語によって対象として切り出される以前の、頭前してあるままの性質を指していると言えよう。そしてこれはAs45に説かれていることと矛盾しないし、さらには中観派の二諦説にも通じるものである。二諦説とこれらの経論の三性説との違いは、後者が言語表現あるいは構想作用の拠り所となる外界の対象を「存するもの」として認め、三者の区別を明確にする点にある。

そしてさらに後の経論においては、この三性説はその論理構造を保ったまま、知識の中に取り込まれる。つまり唯識思想と三性説がここで初めて結びつくのである。依他起性を虚妄分別であることとは、外界の対象、つまり言語表現の所依となるものが知識の中に取り込まれていることを示している。そうした唯識的三性説が見られるのがMSA, MAV, MS, Trims, Trisである。これらの経論においては三性説の解釈の相違を多かれ少なかれ、それぞれに持つが、知識の中の三性という点では共通している。これら後半の経論では、明らかにAs45のものからは離れた三性が説かれている。

ただLASだけは、その思想の特殊性から、こうした瑜伽行派の諸経論の思想的発展の中に位置付けることは難しい。そこでの三性説は唯識的な各種概念を用いながらも中観的な立場から解釈されている。As45cdとテキストがほぼ一致する部分に関しては、LASにおいてその前後との関係が分かりづらいことから多くのことは言えないが、As45の内容はLASに引き継がれ、本来の中観的な立場から三性を説くという試みがなされているとも考えられる。ここではこの経典がどの時代に成立したかを明示することはできないが、三性に対する使用語句から判断して早くともSNSやVinsgよりは後であったと言えよう。

本稿ではAsと三性説との関係を中心に検討したが、Asの著者問題の解明のためには、この問題とともに、さらに註(13)でふれたAs内での後代の付加の可能性の問題をあわせて考えていく必要がある。

註

- (1) CSに含まれる4つはLokāitastava(Ls), Nirāpamyastava(Ns), As, Paramārthastava(PS)である。CSの研究史に関しては、拙稿(2002)「Catubstavaテキストの再検討—注釈書を利用して—」、『仏教史学研究』、44-2, pp.1-26を参照して頂きたい。
- (2) Chr. Lindtner (1982) *Nāgārjuna: Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*, Copenhagen.
- (3) *Madhyamakaharatnapradīpa*(Bhavya 作)ではAs19, 20の引用に際して(P no.5254, Tsha327a2~3, 327a5~6), *Tattvasārasaṅgraha*(Dharmendra 作)ではAs19, 38~41ab, 47~48の引用に際して(P no.4534, Nū105a6~7, 102a2~5, 97a7~b1), *Nāgārjuna*によるも

のとされている。

(4) MKはその帰敬偈で縁起が説かれ、全章にわたって空の思想が説かれていくが、XXIV-18に至って「縁起即空」と説かれる。同様にLsとAsでもそれぞれ仏陀を称えつつつ空の思想が説かれていき、Ls22とAs40において「縁起即空」が説かれる。ただ、LsとAsでは比喩がより頻繁に用いられており、これら二讃歌は内容理解の上でMKよりも平易な印象を与える。

(5) P. Williams (1984) "Review article", *Journal of Indian Philosophy*, 12, New York, pp.73~104, especially p.93.

(6) R. Gnoli (1961) *Nāgārjuna: Le Stanze del Cammino di Mezzo*, Biblioteca Boringhieri, 205, reprint Torino, 1979, p.12.1~7 (英訳は本執筆者によるもの): "Sotto il nome di Nāgārjuna vanno parecchi inni o laudi (stava). Quattro di questi formano, per un'antica tradizione che risale almeno al x secolo, un insieme a sé stante, il *Caṅkāvastava* o le "Quattro Laudi". Sulla autenticità di questi inni, generalmente assai belli per l'ardore religioso che li pervade e, insieme, per la profondità del concetto, non abbiamo motivo di dubitare. Lo stile stesso, come osserva G. Tucci, è il medesimo di quello delle *Madhyamaka Kārikā*." (Several hymns or praises (stava) go under the name of Nāgārjuna. Four of these form, according to an ancient tradition that goes back to the 10th century, a whole itself, the *Caṅkāvastava* or the "Four Praises". As concerns the authenticity of the four hymns, which are generally enough beautiful for the religious ardor that they pervade and, at the same time, for the Profound One of the concept, we have no reason to doubt it. It has the same style, as G. Tucci observes, as that of the *Madhyamaka Kārikā*.)

idem, p.12.8~17 (下線は本執筆者によるもの): 'L'unica obiezione contro la loro autenticità, può concernere, semmai, uno solo di essi, l'*Acintyastava* o "Laude dell'Inconcepibile", il terzo e più lungo della raccolta, che, per l'eccessiva concisione di alcune parti, per l'oscurità di altre (forse imputabile, d'altronde, alla versione tibetana), per certi bruschi passaggi e certe ripetizioni, non è, in realtà, escluso che sia una compilazione posteriore. Specialmente sospette, in questo senso, le stanze 43~44 (=45~46 in the Sanskrit edition!), nelle quali è un'evidente allusione alla scuola dei Vijnānavādin o dell'Idealismo buddhistico, considerata, per tradizione, posteriore a Nāgārjuna. Ma la data di Nāgārjuna è poi sicura?' (The only objection against their authenticity can concern, if ever, only one of them, the *Acintyastava* or "Praise of the Inconceivable One", the third and the longest of the collection. For the excessive concision of some parts, for the obscurity of others (perhaps imputable, however, to the Tibetan version), and for certain abrupt passages and certain repetitions, it's not, in reality, excluded that it's a posterior compilation. Especially suspicious, in this sense, are the stanzas 43~44 (=45~46 in the Skt.ed.), in which there is an evident allusion to the school of Vijnānavādin or that of the Buddhist idealism, which is considered, according to tradition, as posterior to Nāgārjuna. But is the date of Nāgārjuna, then, sure?)

また、氏のAs16, 44~46の読みを以下に挙げる。

idem, p.171.14~18 (translation from the Tibetan):

15(=16) Né c'è, in verità, degli esseri natura propria, dal momento che la natura altrui non esiste. Questa credenza alla natura altrui e alla natura propria come può esser mai veicolo di verità? (There isn't also, in reality, the own nature for the beings, from

the moment that the other nature doesn't exist. How can this belief in the other nature and in the own one never be the vehicle of reality?)

idem, p.175.14~44:

42(=44) Quanto nasce da condizioni e da cause è verità relativa e, per dipender da altro, è detto dipendente. La suprema realtà, infatti, è increata. (Everything which is born from conditions and causes is the relative reality and, because it depends on something else, it is said dependent. The supreme reality is, in fact, non-created.)

43(=45) la forma propria, la natura propria, la sostanza reale che esiste. L'essere immaginario non esiste; l'essere dipendente non esiste. (the own shape, the own nature, the real substance that exists. The imagined being doesn't exist; the dependent being doesn't exist.)

44(=46) "L'essere immaginario esiste": qui Tu sostieni una sovrapposizione metafisica. "Per virtù dell'annientamento di ciò che è creato, non esiste": qui Tu sostieni un annientamento. ("The imagined being exists": here You support a metaphysical superimposition. ("By virtue of the annihilation of what is created, it doesn't exist": here You support an annihilation.)

(7) 本稿で「五法」が確認できたのはVinSg, MAV, LAS(これら略称は本稿3を参照のこと)である。五法の概念は三性説との関わりが深いと考えられる。次の研究は五法が三性説成立以後、つまり『解深密経』以降に成立したものだということを論証しようとしたものである。舟橋尚哉(1972)「五法と三性について」、『印度学仏教学研究』, 21-1, pp.371~376.

(8) Chr. Lindner (1982) p.122 note 149: (Gnoli氏の文章の引用の後に) '— But these arguments do not carry much weight: The stylistic features noticed by Gnoli are, in fact, also known from SS and YS the authenticity of which cannot be impeached. The allusions to Vijnānavāda — or more precisely to the Vijnānavāda of *Laṅkāvatārasūtra*, generally held to be posterior to Nāgārjuna — are quite consistent with the fact that Nāgārjuna also refers to this sūtra elsewhere.'

idem, p.155.10~15 (translation from the Sanskrit):

44 Convention (*samvṛti*) arises from causes and conditions and is relative (*paratantra*). Thus the relative has been spoken of [by You]. — The ultimate meaning, however, is absolute (*akṛtrima*);

45 It is also termed (*iti*) own-being, nature, truth, substance, the real [and the] true. — [Conventionally] an imagined thing does not exist but a relative is found [to exist].

note 44: This and the following three verses show the relationship between *svabhāvatraya* (as expounded in the *Laṅkāvatāra*) and *satyadvaya* acc. to Nāgārjuna. *Paramārthataḥ* they are *svārya* but *samvṛtitaḥ paramārtha* (i.e. *pariniṣpannasvabhāva* = *prākṛti, tattva* etc.) is *akṛtrima* etc. and *paratantra*, i.e. *samvṛti* exists, whereas *parikalpita* does not.

note 45: The interpretation of this verse (= LAS II-191) was to become the starting-point of a long controversy between Mādhyamikas who held that *paratantrasvabhāva* only exists *samvṛtitaḥ*, not *paramārthataḥ*, and Yogācāras who held that *paratantra*, as *Laṅkāvatāra* itself states, exists.

Chr. Lindner (1992) "The Laṅkāvatārasūtra in early Indian Mādhyamaka literature", *Études Asiatiques / Asiatische Studien*, 46-1, pp.244~279, esp. p.253.12~20: 'CS III (= As) 45cd is identical to LS II.191ab with the only exception that Nāgārjuna writes *tu* for

ca, which is very nice because he thus makes the intended adversative sense more clear: (LAS II-191 の引用) The rest is obviously an explanation, or a piece of *sūtra*-exegesis. It can all only be seen as CS being based on LS, not vice versa. The importance of these three verses lies in the fact that we here have proof that Nāgārjuna was acquainted with theory of three *svabhāva*-s.

idem, p.262.23-26: 'Nāgārjuna was perfectly familiar with the doctrine of three *svabhāva*-s, and we have seen how he interprets them in the light of *śamvrti* and *paramārtha*, an interpretation which is, naturally, quite unacceptable to Maitreya.'

(9) P. Williams (1984) p.93.15-22: 'The fact that this *stava* (= As) apparently refers to the *trīsvabhāva* theory of the Vijñānavādins was enough to make Ramiero Gnoli suggest rethinking Nāgārjuna's date, but according to Lindtner there is no real problem here since Nāgārjuna was familiar with the Vijñānavāda teachings as such, but it does state *Acintyastava* doesn't in fact refer to the *cittamātra* teachings from LS. Now the *śamvrti* is *paratantra*, and that a *kalpita* doesn't exist.'

idem, pp.93.30-94.13 (下線は本執筆によるもの): 'all one can conclude from the 'trīsvabhāva' section in the *Acintyastava* is that Nāgārjuna made a distinction between the conventional world of dependent origination and flux, and the entities which were erroneously superimposed through construction upon it, and that he called the former 'paratantra'. The words 'parikalpita' and 'parinispanna' aren't used even though in the latter case Nāgārjuna gives a series of synonyms for *paramārtha* in verse 45. The distinction which the *Acintyastava* seeks to make between the conventional flux and erroneous construction was essential to Nāgārjuna's teachings, albeit perhaps implicitly, in all the works which can reasonably be described as authentic (it was also, incidentally, crucial to Tsong kha pa's understanding of Prāsaṅgika Madhyamaka). Without this distinction either the conventional world would have to be completely true. So this new fact derived from the discussion in the *Acintyastava* is that Nāgārjuna used the word 'paratantra' in connection with *śamvrti*. It doesn't follow, therefore, that these verses entail a reference to Vijñānavāda, or that Nāgārjuna knew of the Vijñānavāda. What we may indicate is that the ur-text of LS, which Nāgārjuna was presumably familiar with, did speak of *paratantra* and contrast it with the false construction habitually indulged in by the *prthagjana*, and this may therefore be Nāgārjuna's source for the term and its use.'

(10) F. Tola and C. Dragonetti (1985) "Nāgārjuna's Catustava", *Journal of Indian Philosophy*, 13, New York, pp.1-54, esp. p.18.7:

(As45cd) *nāsti vai kalpito bhāvo paratantras(icc) na vidyate* //

(Tib.: brtags pa'i dnos po med pa nid // gzan gyi dban ni yod ma lags //)

idem, p.43 note 74: 'We adopt the reading *na vidyate* indicated by Lindtner in note, instead of *tu vidyate*.'

idem, p.33.4-11:

44 The concealing (reality) is produced from causes and conditions, and is dependent on something else; it has been called (by you) "the dependent (reality)"; but the supreme reality is non effected.

45 Also (it could be) called: an own being, the primary matter, the truth, the substance, existing entity; an imaged thing does not exist, a dependent (thing) does not

exist.¹⁶

idem, p.49 note 191: 'The last *pāda* of this stanza reads in Lindtner's text as follows: *paratantras tu vidyate* according to the Tokyo's and Gokhale's manuscripts. It seems strange that Nāgārjuna or any *Mādhyamika* philosopher can affirm that *dependent things*, produced out of causes and conditions, exist, what is against his most firm principles. So we have preferred to adopt the reading *na vidyate*, which is, as Lindtner says, p.124, "a *varia lectio* in the Sanskrit Ms(s) now presumably lost, but inferable from a recension of the Tibetan trans.":

酒井真典(柴朗) (1959)「龍樹に帰せられる讃歌一特に四讃について」、『日本仏教学会年報』, 24, pp.1-44, esp. p.32.18-21 (酒井氏は問題の点に特に触れてはいないのでチベット訳からの和訳のみを示す):

[44] 因と縁により生じたものでもあり依他起より俗諦(出づ)、されば依他起とよく説かれたり。勝義は為作されしものに非ずして

[45] 本性と自性と実際の物、事であることでもあるなり。分別(已弁)されたる事なく、依他起あることなし。

斎藤明(1986)「龍樹作『四讃頌(Catustava)』について」、『宗教研究』, 267, pp.163-165, esp. p.164 lower 13-17:「CS内のほとんどの偈頌は、『中論』の著者たる龍樹(150-250頃)に帰したとしても思想上矛盾をきたすとは考えられないのであるが、AS内の次のくだりは明らかに唯識派の三性説とバラレルものがあり、問題視されざるを得ない。」

八力広喜(1986)「Nāgārjunaの『四讃頌』—特に Lokālitastava と Acintyastava—」、『密教文化』, 155, pp.124-111(横), esp. p.120.6-8: (As 45 と LAS II-191 のテキストを挙げた後に)「これで見る通りほとんど同じであると言ってよい。そして、この内容は唯識三性説における遍計所執性と依他起性のものつ性質をのべているものと考えてよいであろう。」; *idem*, p.120.18-20:「Nāgārjuna が三性説を知っていたという見解には、われわれも同意しかねる。」; *idem*, p.120.27-28:「LSの成立は Nāgārjuna よりも後というものが、われわれのとの立場である。」

八力広喜(1986)「『超世間講』・『不可思議講』試訳」、『印度哲学伝教』, 1, pp.72-88, esp. p.82.6-9:

44 世俗的なことは因と縁より生じたものであり、他に依存するものである。他に依存すると語られても、最高なものとは人為的でないものである。

45 自性、プラクリティ、原理、実体、実在するもの、分別構想されたものは存在しないが、他に依存するものはある。

G. Namdol (2001) *Catustavaḥ of Nāgārjuna (Sanskrit text with Tibetan version and Hindi translation)*, Bibliotheca Indo-Tibetica Series, 50, Varanasi, V pp.63.1-64.3: (取り上げた部分の Skt.ed.は Chr. Lindtner (1982)のものと同じなので省略した。以下のヒンディー語の和訳は本執筆のもの。)

44 *śamvrti* hetu aura *pratyayom* se *utpanna* aura *paratantra* (*krtrima*) *hai* / *isalie* [*śabhi* *hetu*-*pratyaya* se *utpanna* *dharma*] *paratantra*[-*svabhāva*] *kahe* *gaye* *haim* / *paramārtha* to *akrtrima* (*hetu*-*pratyaya* ke *binā*) *hai* / 世俗的なものは原因と諸条件から生じたものであり、また他に依存した(人為的な)ものである。それゆえ[実にあらゆる原因と条件から生じた現象は]他に依存した(本体をもつ)ものであると言われる。しかし最高の意味(実)は人為的でない(原因や条件をもたない)ものである。

45 [*vahi* *paramārtha* *parinispanna*] *svabhāva* *hai*, *prakrti* *hai*, *tattva*, *vastu*, *evam* *sat* *bhī* *hai* / [*vikaipa* *dvarā* *nirmita*] *parikalpita*-*bhāva* *nahim* *hai*, *kintu* *paratantra* (*hetu*-

pratyaya samutpanna) to vidyamāna hai / (まさにその完成された最高の意味(真実)は) 本体である、プラクリティである、真実、事物、同様に存在でもある。(構想作用によって作られた) 構想された存在はないが、しかし他に依存した(原因と条件から生じた)ものとして、そのと き存在している。

- (11) サンストリットはChr. Lindner (1982)に基づいたもの、和訳は本執筆によるもの。
 (12) チベットの *dpad med* に使った。
 (13) Lindner 氏の校訂では *tathatā dravyam* となっているが、本稿で取り上げた注釈書の読みでは *tathatā-dravyam* となっている。しかしいずれの読みを探るにせよ、Nāgārjuna がこうした表在のようなものを認める表現には思想的な問題が残る。MKには *dravya* という語は出てこない。D. F. Burton (1999) *Emptiness Appraised, A Critical Study of Nāgārjuna's Philosophy*, Richmond(UK), pp. 213~220 では *As41* で用いられている *paramārtha* と *dravya* に関して、また Nāgārjuna の著作に見られる *svabhāva* のもつ二面性について考察がなされている。そこで論じられているような、*svabhāva* を空性の同義語として積極的に認める記述を、Nāgārjuna のものでないとするならば、*As* に後代の付加があると考ええることも可能であろう。その場合、デンカル目録とプトンの目録にある *As* の偏頭数 50(拙稿(2002) p.9 list.) を考慮に入れ、全 69 個のうち *dravya* や *svabhāva* を空性(あるいは *paramārtha*) の同義語とする第 41~46 個、また「大乘における法無我」という表現の見られる第 2 個、またチベット訳に欠ける第 13, 25 個の計 9 個が後代の付加として疑われるものである。
 (14) 東京大学総合図書館蔵。S. Matsunami (1965) *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*, Tokyo: New number 340-1.
 (15) 以下のテキストは本執筆による校訂テキストである。紙幅の都合もあり、写本そのままの表記はいちいち注記しなかった。

(16) *svatantra* という語は *As* にも *MK* にもないが *Ls22c* にある。
 (17) 三性とはこの現象世界の三つのありようを指したものであって、本来は、いずれかがいずれかの属性であったり、基体であったりということではないことに注意しなければならない。例えば、依他起性が遍計所執性の基体であったり遍計所執性は依他起性の属性である、と言われるとき、この場合の遍計所執性はいずれも遍計所執性そのものではなく、「言語表現される可能性」というほどのものであり、遍計所執性である「言語表現され、実体視されたありよう」そのものを指すわけではない。例えば『撰大乘論』II-4 では円成実性の説明が依他起性と遍計所執性との関係からなされ、また II-15 で遍計所執性が依他起性との関係から説明されているが、本来の三性のあり方は II-17, 23, 28 に説かれる通りである。

- (18) 竹村牧男 (1995) 『唯識三性説の研究』, 春秋社, 東京, pp. 49.3~50.2.
 (19) Skt.ed.: U. Wogihara (1971) *Bodhisattvabhūmi, A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, Tokyo: another Skt.ed.: N. Dutt (1966) *Bodhisattvabhūmi. [Being the XVth Section of Asaṅgapada's Yogācārabhūmi]*, Tibetan Sanskrit Works Series, 7, Patna; Japanese translation: 相馬一寛 (1986) 『菩薩地 真実義章試訳』, 『南都仏教』, 55, pp.105~126. その他『瑜伽師地論本地分』の菩薩地以外の章に関する、三性説と関連した研究として: L. Schmithausen (2000) "On three Yogācārabhūmi passages mentioning the three *svabhāvas* or *lakṣaṇas*", *Wisdom, Compassion, and the Search for Understanding, The Buddhist Studies Legacy of Gajin M. Nagao*, ed. by J. A. Silk, Honolulu, pp.245~263.
 (20) 「あるもの(A)があるところ(B)にない時、それ(B)はその(A)点で空である、と正しく見る。そこにあるお余るもの(C)、存在しつつあるそれ(C)は今ある、とありのままに知る。これが、ありのままに、誤りなく空性へ入ることだと言われる。(p. 47.16~20)」は空性の定型句と言われ、

それは中阿含の『小空経』に由来すると言う。長尾雅人 (1978) 『空性に於ける「余れるもの」』, 『中観と唯識』, 岩波書店, 東京, pp. 542~560; 向井亮 (1974) 『瑜伽論』の空性説—『小空経』との関連において—, 『印度学仏教学研究』, 22-2, pp. 368~375, esp. p.374 lower 6~11; 『小空経』では、空性は、あくまでも空に住するための観法(空観)の問題から捉えられ、煩惱の有と無を如実に知って悟るという修論論的性格が強いのにに対し、『瑜伽論』(=BBh)の空性説は、ことばと実在という『般若経』と親しい問題が前面に出され、道理の上から存在論的に説かれている。そして、ここでは、空性の有的なあり方が特に強調されている。

(21) 竹村牧男 (1995), p. 57.2~3: 「仮設された法と仮設の所依の区別は自覚したものの、仮設の所依と法性そのものの区別の自覚はさほど明確ではなく、したがって、三種の存在論的範疇を明確に主張するには至っていないのである。」

(22) Tib.ed. and French trans.: E. Lamotte (1935) *Somdhirmocanasūtra, l'Explication des Mystères, Texte Tibétain Édité et Traduit*, Louvain et Paris; German trans.: E. Frauwallner (1956) *Die Philosophie des Buddhismus*, Berlin, pp. 284~285 (VI-1~12, VII-1~10, 24); Japn.trans.: 梶谷憲昭 (1994) 『唯識の解釈学『解深密経』を読む』, 春秋社, 東京. またここに説かれる三性説は兵藤一夫 (1990) 『三性説における唯識無境の意義(1)』, 『大谷学報』, 69-4, pp. 25~38, esp. pp. 26~33 によくまとめられている。また本稿では扱えなかった『般若経』の「弥勒請問章」と三性説との関連についてもまとめられている。

(23) 清浄と雑染の特徴をもつ現象(*kun nas ñon mois mtshan ñid chos*) 「特徴をもたない現象 (*mtshan ñid med pa'i chos*)」 「雑染な特徴をもつ現象(*kun nas ñon mois mtshan ñid chos*)」 「清浄な特徴をもつ現象(*sin tu rnam dag mtshan ñid chos*)」 に関しては、それら三者をそのまま三性に対応させることには問題があるように思われる。VI-11, 12 にはその対応は明示されていない。兵藤一夫 (1990) pp. 30.30~31.9 ではそれら三者はそれぞれ遍計所執性、依他起性、円成実性に関係づけられるとされ、特に遍計所執性と依他起性への配当に関してはこれら VI-11, 12 だけでは判断しかねる。梶谷憲昭 (1994) pp. 107~117 でもこれら三者は三性に相当するものとして解説されていない。あえて分類するとすれば、水晶の喩えなどからはむしろ「特徴をもたない現象」が依他起性で「雑染な特徴をもつ現象」が遍計所執性にあたらないではないだろうか。

(24) Tib.: P. no. 5539, Zi1~Y14258; D. no. 4038, S11~Z1127a4 (本稿では以上 2 版を校合)。VinSgにおける三性説は、兵藤一夫 (1991) 『三性説における唯識無境の意義(2)』, 『大谷学報』, 70-4, pp. 1~23, esp. pp. 2~4 によくまとめられている。

(25) 横山敏一 (1976) 「nimitia(相)について」, 『仏教学』, 創刊号, pp. 88~111. これは *mtshan ma*, *rgyu mtshan*, *rgyu* とチベット訳される *nimitia* 一般に関して考察した優れたものである。その中で五法の「因相」に関する考察もあり、経論によってその価値が異なることが指摘されている: pp. 94.1~98.17.

(26) VinSgでの五法に関する研究として次のものがある: 勝呂信静 (1985) 『瑜伽論』撰訳分における五事・三性説』, 『立正大学大学院紀要』, 1, pp. 1~20.

(27) P. 124b2~4(D Z122b3~5), P. 125b6~8(D Z123b6~7); 兵藤一夫 (1990) pp. 3.27~4.16. この箇所では「雑染となっている依他起性(*kun nas ñon mois par'gyur ba'i gzan gyi dban gi ño bo ñid*; P.24b3)」と「清浄となっている(依他起性) (*rnam par byan bar'gyur ba*; P.24b3)」や、二種の依他起性として「遍計所執性に執着することによって得られるもの(*kun brtags pa'i no bo ñid la mñon par'zen pas kun nas blan(D bslan)*) ba: P.25b7~8)」と「それ(遍計所執性)に執着することがないことにより得られるもの(*de la mñon par'zen pa med pas kun nas blan(D bslan)*) ba: P.25b8)」が説かれている。

(28) その理由は VinSgにおいて SNS が引用されているからである。兵藤一夫 (1990) p. 35 note 5; L. Schmithausen (1987) *Alayavijñāna, On the Origin and the Early Development of a*

- Central Concepts of Yogācāra Philosophy, I and II, Tokyo, p.13.4~8, p.14.11~13.
- (29) Skt.ed. and Frch.trans.: S.Lévi (1907, 1911) *Mahāyānasūtrālamkāra, Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule selon le Système Yogācāra*, I and II, Paris: its corrigenda: G.M.Nagao (1968) *Index to the Mahāyānasūtrālamkāra (Sylvan Lévi Edition)*, 1, Tokyo: another Skt.ed. and English trans.: S.V.Limaye (1992) *Mahāyānasūtrālamkāra by 'Asaṅga'*, Bibliotheca Indo-Buddhica Series, 94, Delhi; and the XI's Skt.ed.: 舟橋尚哉 (2000) 『大乗莊嚴經論』の諸問題並びに第11章求法品のテキスト校訂, 『大谷大学研究年報』, 52, pp.1~69. 本稿では個領部分のみを扱う。またここでの三性説は、兵藤一夫 (1991) pp.4~14 によくまとめられている。
- (30) 勝呂昌勝 (1982) 「二取・二分論—唯識説の基本的思想—」, 『法華文化研究』, 8, pp.15~57, esp. pp.15~19. 氏は前者を「實在論的な主観・客観」、後者を「観念論的な主観・客観」とする。(p.17 lower 17, 19)
- (31) Skt.ed.: G. M. Nagao (1964) *Madhyāntanibhāga-bhāṣya*, Tokyo: Japn.trans.: 長尾雅人 (1967) 「中正と阿極端との分別(中辺分別論)」, 『世界の名著 2 大乗仏典』, 中央公論社, 東京, pp.397~426. 本稿では個領部分のみを扱う。
- (32) 兵藤一夫 (1991) p.17 note 20: *MSA* と *MA V* の「先後は明確ではないが、三性説としては、後者の方が虚妄分別を中心に組織化されている。」ただし *MSA* XVIII-43, 44 の注釈部分には *MA V* への言及がある: *yathōktam Madhyāntavibhāge* / (S.Lévi (1907) pp.140.26~141.
- 1). *MSA* は個領部分と注釈部分が同一人物によるものでない可能性があるため、このことによつて 1) だけに *MSA* の個領部分に対する *MA V* の先行性が証明されるわけではない。
- (33) *MA V*: *svabhāvas tri-vidho 'sac ca nityam sac cāpy atattvatah / sad-asat tattvataś cētī svabhāva-traya isyate // III-3 samāropāpavādasya dharmā-puḍgalayor iha / grāhya-grāhakayoś cāpi bhāvābhāve ca darśanam // III-4 As: svabhāvat prakṛtis tattvam dravyam vastu sad ity api / nāstī vai kalpito bhāvah paratantras tu vidyate // 45 asfīti kalpīte bhāve samāropas tvaṃyōditah / nāstīti kṛtakōchedah ucchedas ca prakāśitah // 46*
- (34) Tib.ed.: E.Lamotte (1938) *La Somme du Grand Véhicule d'Asaṅga (Mahāyāna-saṃgraha)*, I, Louvain; Japn.trans.: 長尾雅人 (1982) 『大乗論 和訳と注解 上』, 講談社, 東京.
- (35) 「知識のみ」ということは以下の諸箇に見られる: II-6, 7, 8, 9, 11, 13, 14.
- (36) Skt.ed.: S.Lévi (1925) *Vijñaptimātratāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu Vinśatikā (La Vintaine) Accompagnée d'une Explication en Prose et Trinitikā (La Trinitaine) avec le Commentaire de Shīramati*, I, Paris; Japn.trans.: 荒牧典俊 (1976) 『唯識三十論』, 『大乗仏典 15 世親論集』, 中央公論社, 東京, pp.31~190.
- (37) 「この全ては表象にすぎないものである (īdam sarvam vijñapti-mātrakam: 17cd)」
- (38) Shīramati による注釈に基づいた、この語の解釈として: 服部正明 (1976) 「識の変化」, 『東洋学術研究』, 15-1, pp.1~17: 「識が瞬間ごとく表象をもつものとして生ずること」(p.4.3) および 「現勢的な識と潜在意識とが、同じ瞬間において相互に因となり果となること」が「識の変化である」(p.5.11). その他この語に関して: 長尾雅人 (1952) 「転換の論理」, 『中観と唯識』, 岩波書店, 東京, 1978, pp.237~265.
- (39) 「三種の本体によって三種の無自性性がある (tri-vidhasya svabhāvasya tri-vidhām nibh-svabhāvatām: 23ab)」

- (40) Skt.ed. and Tib.ed.: L. de La Vallée Poussin (1933) "Le petit traité de Vasubandhu-Nagarjuna sur les trois natures", *Mélanges Chinois et Bouddhiques*, 2/1932~1933, Bruxelles, pp.147~161; Japn.trans.: 長尾雅人 (1976) 「三性論」, 『大乗仏典 15 世親論集』, 中央公論社, 東京, pp.191~213. なお *Tris* の *Vasubandhu* 作に疑問を呈する論文以下のものである: 菅原泰典 (1996) 「世親『三性論』の撰述に関する疑問」, 『文化』, 60-1, 2, pp.108~127.
- (41) *Tris* に見られる動詞 *khyā*-およびその派生語 *khyānam*, *khyāir* などに関しては、伊藤重敬 (1963) 「*Trisvabhāva-kārikā* にみられる三性の基本性格について」, 『印度学仏教学研究』, 2-1, pp.125~126 に詳しい。
- (42) Skt.ed.: B. Nanjio (1923) *The Lankāvatārasūtra*, Bibliotheca Otaniensis, I, Kyoto; another Skt.ed.: P. L. Vaidya (1963) *Saddharmalankāvatārasūtram*, Buddhist Sanskrit Texts, 3, Darbhanga; Japn.trans.: 安井広済 (1976) 『梵文和訳入楞伽經』, 法蔵館, 京都; another Japn.trans.: 常盤義伸 (1994) 『研究報告(第二冊)『ランカーに入る』—梵文入楞伽經の本文全訳と研究—』, 2 vols(1 本文・研究, 2 註), 明文舎, 京都; another Japn.trans.: 南條文雄, 泉芳雄 (1927) 『那伽梵文楞伽經』, 民文社, 京都; Engl.trans.: D. T. Suzuki (1932) *The Lankavatara Sutra, A Mahayana Text, Translated for the first time from the original Sanskrit*, London.
- (43) B. Nanjio (1923), II: pp.56.14~58.1, pp.62.6~63.1, pp.67.2~68.7, pp.117.18~118.4, pp.127.14~133.1, III: p.150.9~16, pp.163.10~164.4; VI: pp.224.4~229.9.
- (44) B. Nanjio (1923) pp.62.7~63.1, esp. p.62.14~16: *deha-bhoga-pratīṣṭhā-gāti-svabhāva-lakṣanam mahāmate ālaya-vijñāna-grāhya-grāhaka-lakṣanena pravartamānam* ……(「身体と享受と依り所」が有する本体の特徴は、アローヤ識の「捉えられるもの」「捉えるもの」の特徴として生じつつあるものであるが、……)。つまり、依他起性に当る分別はアローヤ識を基礎に「心」と「心に属するもの」に分かれており、そのうち「心」は残り七識に当たり、他方の「心に属するもの」としてここに「身体と享受と依り所」が挙げられていると考えられる。このような考え方は *MSA* XI-40 に対する *Vasubandhu* の注釈にも見られる。詳しくは高崎直道 (1976) 「入楞伽經の唯識説—“Deha-bhoga-pratīṣṭhānam Vijñānam” の用例をめぐって—」, 『仏教学』, 創刊号, pp.1~26, esp. p.14.11~12 を参照のこと。またこのような分類は、同じように八識を依他起性に関連付けて説く *Tris* のものとは異なることには注意しなければならぬ。
- (45) B. Nanjio (1923) p.150.14~16: *bāhya-vicītrārthōpalambhābhiniवेश citta-caitta-kālāpo vikalpa-samsābdītah pravartamānah pravartata ātmātmīyābhiniवेश / (外界の様々な対象の認識への執着、つまり「自己」と「自己に属するもの」に対する執着から、分別と名づけられる現に生じつつある「心」と「心に属するもの」の総体が生じる。)*
- (46) *LAS* の成立年代に関しては未だ確定をみない。少なくとも I, IX, X の 3 章は最古の漢訳である。求那跋陀羅訳(大正 06. 443 年訳)にないことから後代の付加だとされ、またこの漢訳には存在しない個領もある(例えば、II-199)。しかも X 章が「古い素材をかなり正確に伝承している」(久保田力 (1989) 『楞伽經』依用の論師—「個領品」成立に関連して—, 『文化』, 52-3, pp.13~44, esp. p.167 lower 9~10.)とも言われる。しかし II~VIII 章、上記漢訳、X 章の三者に共通する部分だけを考慮した場合にも、上に見てきた三性に対する考え方は変わらず適用される。成立年代に関する研究では *LAS* と *Vasubandhu* の前後関係が問題とされることが多い。例えば、L.Schmitthausen (1992) "A note on Vasubandhu and the Lankāvatārasūtra", *Asiatische Studien / Etudes Asiatiques*, 46-1, pp.392~397; 舟橋尚哉 (1971) 「世親と楞伽經との前後論について」, 『印度学仏教学研究』, 21-1, pp.321~326. その他 *LAS* の成立に関する研究として: J. Takasaki (1982) "Sources of the Lankāvatāra and its position in Mahā-

yāna Buddhism", *Indological and Buddhist Studies, volume in honour of Professor J. W. de Jong on his sixtieth birthday*, Camberra, pp.545~568; 久保田力 (1984) 『『楞伽經』の形態的成立史論—内部構造と原型への視点—』、『論集』, 11, pp.67~96; Chr. Lindtner (1992) "The Laṅkāvatārasūtra in early Indian Madhyamaka literature", *Asiatische Studien / Études Asiatiques*, 46-1, pp.244~279.

(47) 例えば、安井広済 (1961) 『中観思想の研究』, 法蔵館, 京都, p.84.2~3. LASでは「瑜伽行派の三性説が説かれるにわかかわらず、全体として中観派的な空観の色彩が強い。」また氏はこれに続いてLASに見られる二諦説の特色を解説していく。

(48) B. Nanjio (1923) pp.127.14~133.1.

(49) またそれに続くLAS II-191cdとAs46の記述の類似性にも注意が必要である。

LAS: *nāsti vai kalpīto bhāvah paratantraś ca vidyate / samāropāvādām hi vikalpanto vinaśyati // II-191*

As: *svabhāvah prakṛtis tattvam dravyam vastu sad ity api /*

nāsti vai kalpīto bhāvah paratantraś tu vidyate // 45

astīti kalpite bhāve samāropas tvayōditah /

nāstīti kṛtakōchedād uchedaś ca prakāśitah // 46

なおLAS II-191はX章にも再出する(X-305)。またこの偈は護法(530~561)の『大乘広百論釈』(大正no.1571)とBhāviveka(ca.490~570)の*Prajñāpradīpa*のXXV章で、ともに經名を挙げずに、唯識派の経証として引用されている。久保田力(1989) p.160 upper 6~8. 興味深いことに後者において、Bhāvivekaはその同じ偈を中観的に解釈してみせている。その部分の和訳: 安井広済(1961)『中観思想の研究』, 法蔵館, 京都, pp.327.13~328.13.

(50) II-187, 194, 198, 199.

(51) II-193, 196, 197, 202.

(52) II-182, 185, 202.

(53) 「後期の作」と考えるのは次の二つの理由による。1) Nāgārjunaの著作のうち paratantra という語はAs4にしかない。もし彼が早い時期からこの用語を使用したら他の著作にあってもおかしくないはずであろう。2) Asの内容はMKのものに一致する上、そこにはMKのエッセンスが簡潔な文章の中に詰まっており、Nāgārjunaの著作技術および自らの思想への熟達ぶりが伺える。

(54) MA VやLASでは、三性と中観思想を組み合わせた説き方にAs45との共通性があるだけでなく、前項で指摘したように両者ともにAs45, 46とのテキスト上の類似がある。また、これまでの研究にも三性説と二諦説との関連を指摘するものがある。例えば、服部正明(1970)『仏教の思想4 認識と超越<唯識>』, reprint 角川書店, 東京, 1997, p.167.11~13: 「しかしながら、「三種の存在形態」という学説は、内容的には『中論』における究極的な真理(paramārtha-satya 勝義諦)と一般的な真理(samvṛti-satya 世俗諦)との区別に関連していると理解することができ。」

(55) 竹内牧男(1995) pp.54.4~57.4. ここで竹村氏はBBhに三性説の萌芽が見られることを確認されている。また、三性説の源流を初期大乘經典に求める試みには次のようなものもある: 荒牧典俊(1976)「三性説ノート(1)」, 『東洋学術研究』, 15-1, pp.18~37; 荒牧典俊(1976)「三性説ノート(2)」, 『東洋学術研究』, 15-2, pp.17~34.

(つだ・あきまさ 京都大学大学院修了)

南都佛教

第 83 號

南都佛教研究会

東大寺

2003

NANTO BUKKYO

or

Journal of the Nanto Society for Buddhist Studies

No. 83

October 2003

CONTENTS

Articles

- Kōsei Morimoto : Tōdaiji Temple and the *Hua-yen Sūtra* —The Process of the Interpretation of the *Hua-yen Sūtra* by Emperor Shōmu. 1
- Kuniyasu Atago : A Background of the Publication of the *Verbatim Note of the Emancipation of a Departed Soul* (Shiryō-Gedatsu-Monogatari-Kikigaki).44
- Makiko Onishi : Motifs taken from the *Sūtra of Contemplation of Amitābha's Paradise* Depicted in the Early Tang Period in the *Paradise of Amitābha* at Dunhuang.62
- Takeo Oku : The Date of Production of Kongō Rikishi (*Vajrapāṇi*) among the Eight Statues Attached to the Title Board for West Gate of Tōdaiji — As a refutation of Matsuura Masaaki's Argument.96
-
- Akimasa Tsuda : Does the *Acintyastava* concern the *Trisvabhāva* Theory ?(98)
- Kiyokuni Shiga : The Polemic about the Inference-theory between the Buddhist and Jainist — Mainly on *Trilakṣaṇahetu* vs *Ekalakṣaṇahetu*.(60)
- Ritsu Akahane : On the Value of "*avicāraikaramaṇīya*" as an Indicator to Establish the Date.(33)
- Kei Kataoka : Experience and Reflection: Historical Development of the Argument on the Means of Grasping Invariable Concomitance.(1)
-

Published

by

NANTO BUKKYO KENKYUKAI

(*The Nanto Society for Buddhist Studies*)

Todaiji Temple, Nara, Japan

ISSN 0547-2032